

## 三韓と倭の交流 海村の視点から

Interaction between the Three Han States and Wa:  
From the Perspective of Settlements Based on Marine Resources

### 武末純一

TAKESUE Jun'ichi

はじめに

①海村の設定

②国の形成と海村

③朝鮮半島南部の弥生人

④楽浪土器と中国貨幣

⑤冶鉄遺構と鉄素材、原料鉄

おわりに

#### 【論文要旨】

弥生時代の農村は、海や山の生業が主体となる村を生み出す。この場合、海村・山村の目安になるのが石廬丁の量である。海村とした福岡県御床松原遺跡での石廬丁の量は通常の農村の1/5程度である。海上活動の比重が高かったとみられる対馬ではこれまで石廬丁は数点しかない。

前期末～中期前半の国形成期には、朝鮮半島から渡ってきた後期無文土器人系の集団が、拠点集落の周縁部に位置しながら故地との交流回路を維持して交易を主導し、港を整備し、青銅器生産技術を転移させて、国づくりにも関与したとみられ、いくつかの海村では海上交易活動が本格化する。

またこの時期には朝鮮半島南部にも弥生人の足跡が見られる。靑島遺跡の弥生系土器は中期前半が主体とされたが、近年では中期後半の土器も大量に出て、下限は弥生後期前半である。弥生中期前半以前を靑島Ⅰ期、中期後半以降を靑島Ⅱ期とすると、靑島Ⅱ期には靑島Ⅰ期よりも日本との交流の範囲は拡大する。ここには北部九州系の漁具（アワビおこし、結合式釣針）があり、北部九州の「倭の水人」の移住を示す。山陰地域にもそうした漁具があり、海民のつながりができていた。

中期後半以降（弥生後半期）の西日本と朝鮮南部の海村には楽浪土器や中国銭貨が目立つようになり、近畿から楽浪郡までの交易網に組み込まれたと見られる。とくに中国銭貨は、中国鏡とは対照的に、海村の日常生活域から多数出土するが、国の中心となる巨大農村やそこから展開した都市的集落ではほとんど出ない。これは朝鮮半島南部も同じで、靑島遺跡では日常生活域から5点出たが、拠点集落の日常生活域からは出ない。しかも倭と三韓の沿岸部では、ともに大量の中国銭貨が発見されている。したがって西日本と朝鮮半島南部の海村では農村とは別の世界をつくり、生業活動の主体である交易活動の場で中国銭貨を対価に用いたと見られる。交易の対象物はおそらく原料鉄や鉄素材であった。また、海村の南北市糶とは、南の物資を北に、北の物資を南に単に移動させるだけでなく、中間で加工して付加価値をさらに高めた可能性も出てきた。

【キーワード】 日朝の海村、弥生時代後半期、原三国時代、渡来人集団、楽浪土器、中国銭貨